これでわかる！心臓病の子どもの看護のきほん

特集にあたって

先天性心疾患をもつ子どもへの看護の学びを深めるために

心臓病の子どもたちは小児専門病院や循環器専門の施設にとどまらず，日本各地の多くの施設で医療を受けることができるようになりました。病院のみならず，地域の保健センターやクリニック，訪問看護ステーション，療育センターなど，心臓病の子どもを看護する機会は増えています。

心臓病の子どもは継続して医療を受ける必要がある子どもが多く，会うたびに成長していく子どもの姿を見ることも看護師のやりがいです。一方で，心臓病の子どもの看護は「命に直結するので怖い」「病態が複雑でわかりにくい」「わからないので不安」という声もよく聞かれます。担当するのは，周術期あるいは検査のための入院，または，治療が済んで退院した後の子ども，心臓以外の疾患やけがで治療を受ける子どもかもしれません。心臓病の子どもの医療がさまざまな場で行われているなかで，心疾患の看護を学ぶにはどこから手をつければよいのか困っている方もいるでしょう。

そこで本特集では，心臓病の子どもに初めてかかわることになった看護師でも，先天性心疾患の特徴的な病態や看護のきほんを学べること，看護の面白さや学ぶコツをつかめることをねらいとしました。

基礎知識として，まずは正常な心臓と先天性心疾患の心臓はどこが違うのか，看護ではどこをみていけばよいのかを解説します。そのうえで，病態と症状，安定した状態を保つための看護，血行動態の変化に伴う症状への看護を，循環器を専門としない看護師にもイメージできるよう解説します。

「末梢冷感」「血圧」「尿量」「水分出納」などの特有な観察がなぜ必要なのか，「多呼吸」「チアノーゼ」などの症状がなぜ起こっているのか。学びを深めると，観察を含むケアの根拠がわかるようになり，さまざまな場面で応用できるようになります。

先天性心疾患の治療の特殊性として，手術に必要な人工心肺のしくみ，麻酔の影響や循環動態を保つために必要な鎮静についてもこの機会に知ってほしいと思っています。

さらに，子どもや家族のQOL（quality of life）を支えるケアを考えることができるよう，子どもへの説明の実践，身体活動を高める理学療法，心臓病の子どもが利用できる医療助成について取り上げています。

筆者は小児看護専門看護師や大学教員らと共に心臓病の子どもの看護の学習システムについて研究しています。治療や経過に個別性があること，循環器疾患の臨床経験が施設によって異なること，同じ施設内でも集中治療室と病棟では優先する看護が異なることから学ぶべき内容は多岐にわたりますので，どこに学習の焦点をあてるかメンバーと議論を重ねているところです。

本稿で取り上げた内容は一部分に過ぎませんが，心臓病の子どもの看護のきほんを学び，「看護はおもしろい」と学習を深め，心臓病の子どもの看護実践に活かしていただけますと幸いです。

宗村弥生 Munemura Yayoi
山梨県立大学看護学部母子成育看護学教授